令和７年度　岡山県立倉敷天城中学校　学校評価書

校長　　藤　井　省　吾

1　自己評価

Ⅰ　評価結果

（別紙参照）

Ⅱ　分析・改善策

（１）倉敷天城中学校と倉敷天城高等学校が有機的に協力し、充実した教育活動のできる学校運営を行う。

・中高の教員が合同で中学３年生の進路検討会を実施し、生徒一人一人について普通科・理数科への適性等を検討した。その結果をもとに、保護者懇談において適切なアドバイスを行った。

・各学年において年間３回の情報提供の場を設けることができた。保護者アンケート「本校では、なるほどプロフェッショナルやチャレンジワーク、大学訪問があり、その時間は将来の進路や職業を考えるうえで役に立っている」の結果は、令和６年度の 96.5%に対して令和７年度は 93.7%であり、昨年度より若干低下したものの、高い評価を得ている。

・高校教務課との連携においては、高校授業の直接参観を実施した。生徒は理数科と普通科の特徴を理解した上で、適切に進路選択を行うことができた。また、進路課との連携により、倉敷天城高校への進学に向けた適切な情報を生徒・保護者に提供することができ、高校での生活や学習について、より具体的なイメージを持つ機会となった

・SSH の授業の一環として、中学３年生と高校１年生のサイエンス（探究）の授業を同じ時間帯に設定し、年間３回の交流を実施することができた

（２）開かれた学校づくりを推進し、適切な情報発信を行うとともに、地域と連携することで教育活動を充実させる。

・第１回オープンスクールでは、全クラスで公開授業を２限実施し、参加者は約 500 組に上るなど、高い関心を得ることができた。第２回オープンスクールでは、30 分間の体験授業、学校紹介、入学者選抜実施要項の説明、教員による質問コーナー、保護者による質問コーナーを実施し、参加者は 350 組となり、こちらも高い関心を得ることができた。来年度も効果的な広報活動と情報発信に努め、少子化の中にあっても、さらなる参加者数の増加を目指したい。

・学校行事、学年行事、部活動等については、順調に実施することができた。東雲祭（学園祭）の体育の部では、福田公園の空調設備の整った屋内体育施設を活用して実施することができた。第２学年の広島宿泊研修（２月）及び第３学年の関東修学旅行（11 月）においては、本校の特色ある取組を広島及び東京において高い水準で実施することができた。また、タイムリーなブログ更新をはじめ、ホームページを通した情報発信についても、全教員が積極的に取り組んでいる。

（３）本校生徒に求められる基礎学力とこれからの時代に求められる学力をあわせて身に付けさせ、各生徒にふさわしい進路実現の基礎を培う。

・２月の課題研究発表会は、全国に誇れる高い水準で実施することができた。１・２年生、３年生の保護者、他校生徒（岡山操山中学校・岡山大学附属中学校・矢掛町立矢掛中学校）とともに、対面でのポスターセッション及びステージ発表を行った。また、東京大学、お茶の水女子大学、東京農業大学の教員に加え、３名の岡山大学の先生方による指導も実現し、生徒にとって大変有意義な発表会となった。さらに、３月には横浜市立サイエンスフロンティア高等学校附属中学校の発表会に代表生徒が参加し、課題研究の交流会を行った。各種課題研究やコンテスト等への参加も複数あり、「日本学生科学賞」では２年連続で県内最高賞である県知事賞及び読売新聞社賞を受賞した。

・学習計画表の点検や、学習時間と試験成績の分析等を通して、個別指導及び全体指導を行い、家庭学習時間の確保に努めた。

・教科指導においては、理科の発展学習や数学・英語の基礎学習などについて、始業前及び放課後に学習会を実施した。

・スタディサプリ導入３年目を迎え、全国的にも高い活用状況にあり、自学自習に主体的に取り組み、学習に自走する生徒が増加している。

（４）異年齢の集団、多様性のある集団を活かし、豊かで多様な体験等を通じて、思春期にふさわしい人間的成長を遂げさせる。

・ライフスキル教育については、各学年で年２回実施した。「周囲への思いやり」や「自己受容の高まり」が感じられる生徒の感想が多く見られた。また、ピアサポート活動についても全学年で年２回実施した。生きる力を育む教育の主軸として、今後も一層充実させていく。
・教育相談においては、ケース会議による情報共有やスクールカウンセラーによる相談等を行った。相談希望件数も増加傾向にあり、多様な生徒・保護者の悩みに対応するため、SC（スクールカウンセラー）や SSW（スクールソーシャルワーカー）の協力を得ながら、可能な限りの支援を行っている。また、自立応援室の存在が大きく、教室に入りづらい生徒の居場所として機能している。
・AMAKI 学においては、平和、人権、職場体験など、人間形成に必要な幅広い学習を進めた。

（５）適切な教育環境の整備・管理に努めるとともに、心身ともに健康な生徒の育成のための環境づくり、指導に努める。

・各授業において、Google サービスを活用した小テストの実施、スライド作成、ファイル共有等を積極的に行い、生徒が一人一台端末を主体的に活用しながら探究的に学ぶ「STAGE3」に相当する活用を実現することができた。
・全校生徒の交通マナー向上を図るため、呼びかけや啓発ポスターの作成に取り組んでいる。今後は、家庭の協力も得ながら、より積極的に交通指導を進めていきたい。また、自転車で登校している生徒に限らず、全校生徒を対象として、自転車の安全かつ適正な利用の促進に資する交通安全教育を実施している。
・教育相談、スクールライフ、シャボテンログなど、日常の学校生活を通して生徒の心身の状態を把握するとともに、生徒課会議や職員会議、職員朝礼を通して教員間の情報共有を密に行うことで、学校として一体感のある指導・支援を行った。

２　学校関係者評価委員名

稲田　佳彦（岡山大学学術研究院教育学域　教授）、猪木　浩二（早島町役場　企画総務部長）
北村　増紹（藤戸寺　住職）、藤南　和将（株式会社 ArTechX.ing　代表取締役社長）
橋本　理美（倉敷天城高等学校 PTA 副会長）、藤木　達夫（丸五ゴム工業株式会社代表取締役社長）
松井　　香（倉敷天城中学校 PTA 副会長）、森　　祐紀（兵庫県立大学大学院理学研究科　生命科学専攻助教）、山田　耕三（ベネッセグループ健康保険組合）

３　学校関係者評価

・備蓄品の購入は適切な取組であった。卒業後も備蓄品として有効に活用されており、防災意識の向上にもつながっている。継続していく価値のある取組である。
・中学校・高等学校ともにＡ評価が少ない点については、やや評価が謙虚に過ぎるのではないかと考えられる。年度末に向けて評価が上がるのであれば問題ないが、中学校での取組の成果が高等学校において表れているのであれば、中学校段階での評価についても、より適切に見直す必要があるのではないか。

４　来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

１　生徒一人一台端末を有効に活用し、主体的・対話的で深い学びに向かう授業を深化させる。
２　進路指導、学習指導、学校行事、部活動など、中高の更なる連携等を進める。
３　心の居場所推進プロジェクトの実践を通じ、長期欠席、不登校生徒への組織的対応の強化を図る。
４　中高一貫教育校として、高校卒業後の進路をイメージさせ、生徒自らが目的を持って学習に取り組むことができるよう、進路指導のさらなる充実を図る。
５　業務の見直しや精選、平準化を行うとともに、ＩＣＴを有効に活用することで、教職員の働き方改革を一層推進すると同時に、部活動の在り方も引き続き検討し、ゆとりと意欲の更なる創造を図り、教育活動の質を高める。
６　特別活動、課外活動、校外の活動などに、主体的に取り組ませることを通して、より良い対人関係能力やたくましさを育成する。
７　きめ細かいクラス運営や各種相談を通じて、的確に生徒理解を図るとともに、生徒の自己有用感を涵養する。
８　オープンスクールを充実させるなどをして、学校の魅力を地域の方や小学生とその保護者に丁寧に情報発信をしていく。